東方天勇録

しげもん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校生で命を失った…と思われたが何故か奇跡的に生きて幻想入りをした主人公神使　天は、幻想郷でさまざまな運命に会う、彼はどうなるのか、何故生きていたのか、様々な謎が有るなか描かれる笑い有り！シリアス有り！（の予定）の小説です！

※作者は東方原作未プレイ＋にわかであります、色々調べて書いていきますが、それでも間違いが有る可能性が高いので、間違いを見つけたら暖かい目で見ていただくか報告していただくかお願いします。

後、作者は思い付きで行動（つまり無計画）するので急にドラクエ以外の要素が出てきたりする可能性があるので、注意してください。

目　次

異世界での出会い ―――― 1
お礼という名の生死を分ける出来事 ―――― 6
天の逃走劇、そして出会い ―――― 11

異世界での出会い

「あー…しくじったな…」

今少し落ち込んだ青年、彼の名は神使（かみつかてん）天何処にでも居そうな少し運動のできる高校生の青年である、彼は今学校に携帯を忘れてしまい困っている

「まぁさっさと取りにいくか…」

天の通う学校は山の中にある小さな学校で、生徒や教師が少ない、天の家は山の近くにあり、走れば数分で着く距離にある、天は全速力で学校へ向かった、しかし日はもうとっくに落ちていて、更に山の中と言うこともあり、辺りは真っ暗で懐中電灯が無ければ何も見えない状態である

「参ったな、家に懐中電灯なんてないぞ…もうめんどいから行こ…」

天は、無謀にもこの暗闇の中を光無しに走って行った、更には近道であるが崖等がある危険な道を選んだ、この暗闇でそんな危険な道を進むのは既に自殺行為にもなる、しかし天はそんなこっちゃ関係ないと言わんばかりに全速力で駆け抜ける、しかし携帯ごときでここまで急ぐ必要は無いがここまで急がせる魅力が携帯にはあるのだ、ある意味怖いものである

「くっそ、なんも見えねぇや、さすがに無謀だったか…戻ろうか…」

天がそう言い、振り替えてまた走り出した一歩目、天は地面を足で踏んだ感覚がなかった

「!?やべっ！死…」

天は瞬時に悟った、足を踏み外したのだと、即座に体制を立て直そうとするが既に両足が浮いてある状態であったため無理、手を伸ばし上の地面を掴もうとするが、届かない、こうして天に残された運命は「死」それだけになった、ここの崖は非常に高く、落ちていく間にも考え事出来るほどだ、そこで天は願った

（…何てバカだったんだろうか、たかが携帯一つの為にここまで必死になって死ぬなんて、本当にバカだ…）

（神様…もしいるならお願いです…）
（このバカみたいな奴にチャンスを下さい…）
彼の意識はそこで途絶えた

「…ん」
　天の目が開く、まず目に入ったのは星が綺麗で月の光が眩しい程に目に入る夜空、どういう状況か分からない時でも見入ってしまう程美しい夜空だった
「で、どういう状況なんだ…？」
　天は寝ている状態から起き上がり辺りを見回す、さっきまでいた山の中と似ている風景だが、道がなく、本当に森と言うような風景であった
「俺は確か崖から落ちて死んだ筈だが…」
　訳が分からない状態だが、兎に角誰か居ないかを確かめる為、大声で叫んだ
「誰かー！居ませんかー！」
　案の定返事が返ってくる筈もなく、声が少し響いた
「訳が分からん…先ずは人を探すか出口を探すか…どちらにしろ動くか」
　天は自分の勘だけを頼りに道なき道を進んでいく、幸い先程の山と比べ月の明かりがあるため、障害物は避けて進めた、しかし肝心の人と出口が見つからないでいる
「人間どころか生き物すらいねぇぞ…頼むからなんか出てきてぇ！」
　天がそう叫ぶと、少し先にある草むらが揺れた
「お！すいません！誰かいるなら出てきてくれませんか？」
　天は草むらに近寄る、草むらからは何かが出てくる
「あの、すいませ…ん…」
　しかし草むらから出てきたのは人間でも無く、ましてや動物でもないままで見たことのない生き物、と言うより怪物が姿を表した、天よりも一周りも二周りも大きい体、鋭い爪と牙、熊や狼とは比にならない恐怖を感じさせる、何かを襲う為だけに生まれた体と言っても過言ではない、そんな怪物が姿を表した、天は悲鳴を上げる事もなく腰を抜かす事もなく、只後ろを向き全速力で逃げていた

「何であんな奴に会うんだよ…！」
　天は兎に角逃げることだけを考え走る、しかし怪物は奇声を上げたあと、物凄いスピードで天を追いかけ始めた、怪物は脚力、歩幅、全ての点で天に勝っており、天と怪物の距離はどんどん縮まって行く
「なんちゅう速さだよ！」
　天が怪物がどの位置に居るかを確認する為に後ろを向こうとした瞬間、足元の小石に躓き、転んだ
「痛ぅ～!!」
　天が痛がっている時、怪物は瞬間的に天に追い付き、飛びかかった
（また死ぬのか…折角生きてたのに…）
　天は死を確信し、目を瞑った、天は怪物に喰い千切られる運命…の、筈だった、しかし痛みは感じない、それどころか、何故か怪物の断末魔らしき物が聞こえた、天は恐る恐る目を開ける、そこには頭に一本の矢が刺さった先程の怪物と、その怪物の物と思われる血の溜まりができていた
「これは…「貴方、大丈夫？」え…あ、はい、大丈夫です…けど」
　そこには謎の銀髪で弓を持った美しい女性が居た
「貴方、この辺りでは見たことない顔ね…名前は？」
「えっと…天、神使天です」
「私は八意永琳、この辺りに住んでいる者よ、貴方見たところ人間だと思うけど、人間よね？」
「はい人間でめちゃ人間ですはい、純度１００％」
　天はその質問に迷い無く答えた
「なら良かった、私に付いてきて」
「あっ、へい」
　天は兎に角従うしか無かった
「あのー…一体何処に向かっているんですか？」
「私の家よ」
「家っすか…」（やべぇもうなにがなんだか…）
　天は頭の中がごちゃごちゃになり、混乱しつつ付いていった、暫く歩くと鉄で出来ていると思われるいかにも厳重そうなところについ

た、そのまま永琳に付いていき門を潜ろうとすると
「おいそこのお前、見慣れない顔だが…貴様妖怪じゃないだろうな？」
門番らしき男が銃を此方に向けて構えた
「いっ!?ち、ちがいｍ…」
天が手を上げ必死に否定する所に永琳が割って入ってきて
「大丈夫、彼は人間よ、私が保証する、通らせて」
「はっ！申し訳ありません！通って良いぞ！」
永琳がそう言うと門番は銃を下げ、永琳に向かってお辞儀をして天を通らせてくれた、天は永琳がここの偉い人だと言うのは察しがついた、そして門を潜り抜けるとそこには
「…」（唖然）
近未来的な都市があった
「さあ、行くわよ」
天は完全に混乱していたが、足だけで永琳についていった

お礼という名の生死を分ける出来事

「ほえー…」
　天は今エレベーターに乗っている、高層ビルの壁に沿って上へ上がっていく、浮いて、そう、浮いて。
　外は自然が沢山ある森で、門をくぐると其処には近未来的な大都市が広がっているのだ、エレベーターで上から見ると改めて凄く大きい都市だと言うことがわかる。
　只でさえ何も分からない状況で、こんなものを見せられたら混乱するのも無理はないだろう。
　天がボケッとしている間にチーンという音が聞こえた、目的の階に着いたようだ

　永「さ、行くわよ」
「あの、永琳…さん？「敬語じゃなくてもいいわ「アッ、ハイ」
「そう言えばお礼言ってませんでした、助けてくれてありがとうございます」
　永「まあ礼には及ばないわ、人間として当然ね。」
「おぉ…」（なんかすげぇカッケー…）
　永「後はちょっと興味があったわね」
「興味？俺に？」
　天は自分のような平凡な人間に興味があると言われたことに疑問を持った
　永「まあね、さっきも言ったけどこの都市の人間で無さそうだし、なぜ森の中に居たかも気になる、後一番興味があるのは…なんというか医者の血と言うか研究者の血と言うか…何だか貴方には不思議な物を感じるの。」
「不思議な物ねぇ…」
　永「その不思議な物が私の血を騒がせて…その体をじっくりと調べたい欲望が沸いてきて…」
　永琳は少し興奮気味に言う、その時天は（いかんこりゃもはやサイ

コパスだ…）と声に出しかけたが、ギリギリ踏ん張った、そして恐る恐る聞いた
「その調べたいというのはどんなｋ「着いたわよ」「ヘイ」
敢えなくかき消された
永「まあ此処が私が生活している家ね。」
「デッカ」
流石お偉いさんと言った所か…
永「まあ座ってて、お茶位出すから」
「ありがとうございます」
お言葉に甘えて椅子に腰かける、家具なども高級そうな物に見える。
暫く内装を見ていると、永琳がおお茶の乗ったお盆を持ってきた
永「さて、じゃあ聞きたいことが有るんだけど、どうしてあんなところにいたの？」
「それはもうこっちが聞きたいくらいです、死んだと思ったら何か森の中に今した…」
本当に訳が分からない。
永「へえ…異世界から来るなんて珍しいどころかはじめての出来事ね」
「出来ればその世界に帰る方法をしりたいのだが…」
永「残念ながら今の所ないわね」
「うん、知ってた」
いやしかし戻れないとなると…そういえば
「永琳は何故あの森の中に？あんな物騒な生き物がいる所に好んで入ることなんてないと思うが…」
永「あの森はいろんな種類の薬草があるから何度か入ってるわ、ある意味好んで入っているのかもね」
「あんな物騒な所に？」
永「私には弓があるあら大丈夫よ」
「あー…そういや弓であいつの頭射抜いてたな」
永「あとあれは妖怪、普通の人間が襲われると即死ね」

「マジか…本当にありがとう」
いやこれはもう言葉だけじゃ足りないぐらいだな…本当に永琳に助けてもらってよかった
永「まあ一つ頼みたいことがあるんだけどそれはまた後で、他になにかある？」
そうだな…あとは
「ここはどこなんだ？随分都市化が進んでいるようだが…」
永「単なる地球の発達した都市よ」
「随分と自分の世界と違うな」
この世界は本当に自分の世界とは違うな…しかも妖怪なんてこの世界はファンタジーの世界か何かなのか？
永「他は？」
「そうだな…」
他に聞かなきゃならんことがあるだろうが…思いつかんな
「ありがとう、もう十分だ、もしかしたらいつか聞くかもしれんが、それよりもお礼をしなきゃならん、自分にできることなら何でもやるよ」
永「そう、なら…あなたに会って薬草集めを中断してまだ目的の薬草が集まってないの、その分の薬草を集めてきてくれないかしら？」
「ああ、それぐらいなら…ん？」
自分は森の中で倒れていてそこで薬草集めをしていたわけでそこにあるわけだから…
「あの森にもう一度入れと？」
永「ええ」
「それ死ねっていってんのと同じじゃないか！」
あんな森に入るなんて命がいくつあってもたりないぞ！
永「奇跡的に生きて帰る可能性だってあるかもしれないわよ？」
「うぅむ…」
森に入ったら死ぬだろう、しかしこれを断わったらこの都市の中で悲しく一人で飢え死にするか…もうこうなったらヤケだ
「わかった、受けよう」

永「ありがとう、森はさっきの門を抜けてまっすぐいけばあるから、頑張ってね」
もう生きる希望はないが頑張ろう、永琳には一応助けられたし
永「あ、そうそう、机の上にある物自由に使っていいわよ」
机にあるのは…薬草の画像と名前の書いている紙と薬草を入れる為の袋、後は…剣か
「まあ剣があるだけましか」
その道具を手に持って永琳の家から出ようとする、すると永琳から一言言われた
永「せいぜい頑張ってね」
「まあ期待はしない方がいいからな」
そういって自分は永琳の家から出た。

場所は変わって門の前
「ちょっと失礼」
門A「ん？どうした？お前みたいな普通の人間が門の外に出るなん

て自殺行為だぞ」
二人いる門番の一人に声をかけられる
「永琳に頼まれた薬草を取りに森にちょっと森に…」
門B「そうか、せいぜい生きて帰ってこいよ」
「あいよ」
とりあえず適当に返事をして歩き出す、少し門から離れると声が少し聞こえた
門B「おい、あの人間、生きて帰ると思うか？」
門A「あん？あんな奴死ぬに決まってるだろ、森に入った瞬間妖怪の餌になるだろうな」
門番Aが鼻で笑いつつ言うのが聞こえた、結構イラついた、するとまた声が聞こえた
門B「俺は生きて帰る気がする…」
門A「おいマジかよお前、気でも狂ったのか？普通のにんげんだぜ？」
門B「普通の人間だろうけど…なんか帰ってきそうな気がするんだ」
門番Bの発言になんだかホッとした、この一言で決めるのはアレだがあいつはいい奴な気がする
門A「じゃあ今日の飯賭けるか？帰ってこなかったら俺の飯奢れよ」
門B「帰ってきたら俺の飯な」
「…あいつの為にちょっとぐらい頑張ろうかな」
門番Bの為にも少し気合を入れて森に向かった

天の逃走劇、そして出会い

俺は今、森をさ迷っている、永琳に薬草を取ってきてくれと頼まれたからである、ホントならあんな妖怪の居る所にいきたくなんてないんだが…断っても飢え死にするだけだから引き受けたのはいいが…

「いやホント全然見つかんねぇ…」

一体何時間位さ迷ってるのかわからんが全く見つかんない…この薬草ホントに実在してんのか？疑う位見つかんないよ…近くに川があったから喉は大丈夫だけど腹も死ぬほど減ってるよ、もう気力で歩いてる感じがする、

「頼むから見つかってくれよ～…」

…にしても何か妖怪が全然見当たらないな、会わないことより良いことは無いけど…何か、不気味だな、永琳も結構妖怪居るって言ってたんだけどな…まあ危険な所には代わり無いから速いところ見つけて出なければ。

更に数時間後

「もう歩けん…」

ダメだ完全に尽きた、しんどすぎる、足が動かん…

「頼むからこう言う時には妖怪こないｄ「グウウウァァァ」Ａ…」

今のフラグだったよ…ホントに来ちゃったよ妖怪！しかも何か展開が速い気がする！

「ウガアアアアアアァ！」
「足が痛いけど我慢じゃぁい！」
無理矢理にでも動かさんと死んでまう！兎に角逃げなきゃ！

「ハァ…ハァ…此処までくれば大丈夫か…？」
俺は後ろを振り向く、先程の妖怪はもう追ってきてはいなかった、幸いアイツは足が遅かったようだ。
「フゲェ…もう無理…」
俺は地面に座り込む、足の疲労が尋常ではない、スピードには自信があるが体力は全くない俺、そんなやつ結構いるよな
「ちょっとねころｂ「ガァッ！」ふおお!?」
寝転ぼうとしたら突然妖怪が飛びかかってきた、それを紙一重でかわした俺、自分で自分を褒めてやりたい。
「また逃げんのかよ！」
先程の道を戻ろうとする、すると
「えぇマジかよ…」
先程追いかけてきた妖怪が入り口を塞いでいた、しかも仲間を十何匹か連れて、あ、これコイツらもしかして組んでたのか、挟み撃ちするために…
「妖怪の知能に負ける俺って…」
ジリジリと挟まれて行く俺、これは終わったな…
（…あ、思い付いた！）
何ともバカな発想だが掛けるしかないか…頼む…

「あ！あれは!?」
俺は空を指差し叫ぶ、すると妖怪達は指差した方向を一斉に見た
（ぬおおおぉぉ！）
その間に全力で逃げる、まだ妖怪達は逃げたことに気付いていない、こえはまさか…
「勝ったぁ！天勇録完ッ！」
…って終わったら駄目じゃねーか！何か言いたかったから言ったけど、それで妖怪にも気づかれたし！完全なる誤算（？）だった！
でもかなり差は開いた筈…これは逃げ切れ…あ、
「いかんこれは、フラぐほぉ!?」
やっぱりフラグでしたね、すんごい速い奴に尻尾で十数メートル吹き飛ばされて木に叩きつけられました。
「痛ってぇ…」
これはかなり痛い、意識を保ってるだけでも奇跡なんじゃないかな、触った感触では肋骨何本か逝ってるな、腕も左が折れた感じか、幸い足と臓器は無事か
「だがこれはゴホオェッ！」
喋ることもキツいなこれは、もうダメだね、俺の人生はここでおわるかな、しかしなぜかここで俺は思い出す
「あ…そういや剣もらってたっけ」

なぜ気づかなかったのか、剣を袋から取りだし構える、少しちっちゃいが。
妖怪が迫ってくる、これが効かなかったら人生終了のお知らせが届くだろう、そして妖怪が剣の届く距離に入る、そしえ
「せぇいやぁごっふぐほぁ！」
本当の最後の力を振り絞り剣を振り落とした。
妖怪にその剣が当たる、すると砕け散った…剣が、妖怪は少し怯んだが致命傷にはほど遠い
（…もう何も言うまい）
俺は剣を手放し無防備になる、つもりだったが手に何かが当たった
（また剣かよ…）
まあ本当に本当の最後の足掻きとしていいかな…
妖怪が飛びかかってくる、俺は剣を振り上げた

すると妖怪が真っ二つになった
（!?）
この剣を降った瞬間に何かが変わった、何の変わりの無かった剣が目に見えそうなほどの神々しいオーラを出し、切れ味はどんな鉄よりも良く、羽の用に軽く振れるようになった。
妖怪達はギャーギャーと騒いでいつの間にか十何匹いた妖怪がその死体だけになっていた。
（なんだこの剣…）
ってそれよりも早くでなければ、薬草は見つかって無いけどこのままじゃ死んで薬草どころの話じゃ無くなる。

天は荷物の入った袋を持つ、その剣を入れれる程の空きはあったので袋に入れた、その時に気づいた。
（ん？なんか薬草入ってないか？）
天は袋から薬草を取りだし写真と見比べる。
（やっぱり同じだ！何か良くわからんが後は変えるだけだ！）
天は辛うじて立ち上り、フラフラとしながら出口目指した。

そして森から抜け出した、先程の場所から出口は近く、この森から都までもそう遠くはない、が天は既に意識が朦朧とし、骨が折れた痛みを耐えながら歩いている、完全に気力で歩いている。
場所は変わって門番へ
門Ａ「そういやアイツ中々帰ってこねぇぞ、これは勝ったな」
門番Ａは笑って勝ち誇っている、が門番Ｂは遠くを見て少し笑った。
門Ｂ「それはまだわからんぜ？ほれあっこ見ろ」
門Ａ「んぁ～？…」
門番Ａは遠くを見る、そして驚いた顔をしている
門Ａ「マジかよ…帰ってきたのかアイツ…」
門Ｂ「おし、じゃあ救助行くぞ」
門Ａ「お、おい！待てよ！」
門Ｂ「生死に関わる怪我をしているのを発見した場合、即座に救急室まで運んで来るように、永琳様の指示だ」
門Ａ「分かったよ「後飯奢れよな」へーい」
講して無事天は帰ってこれたのでした、めでたしめでたし

まだ終わらんからね？